
気がつけば異世界の黒き魔女

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気がつけば異世界の黒き魔女

【Nコード】

N3171BA

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

黒き魔女が現われしとき、魔王は復活するだろう。そんな古の言い伝えがある世界。

ただの女子高生だった水瀬やよいは気がつけば異世界にいた。

魔女で、魔王がいて魔物もいる世界。王様は勇者で世界を守ってるんですって。魔女っ子にされたやよいは無事に帰れることができるのか？。

傷薬程度の能力と魔物に好かれる程度の能力で生き延びてみます。

* 1 / 1 2 少し書き直すので記事を下げます。ご了承ください *

【0】 オープニング（前書き）

登場人物

グレン・・・・・・・・・・ワータイガー。

私・・・・・・・・・・主人公の少女。

騎士・・・・・・・・・・追っ手。

黒髪の青年・・・・・・・・・・謎の青年。

【0】 オープニング

それは月下の激闘

目の前に立ち塞がった、炎をまとう鉄槍を持った騎士が瞬撃の突きを放ち、私のコートを切り裂いていた。コートがブスブスと音を立てて焦げると、やよいは見えない衝撃に草原に投げ出され、したたかに地面に叩きつけられていた。

だが、その瞬間、ふわりと風が包み込んで、私は背中を痛打する直撃を避けていた。そして力強い彼の声が響く。

「嬢っ！！」

「へ、平気」

強がりの言葉を吐き出して私は相棒に返していた。

その彼は牙を剥き出し、追ってきた魔法衛士である騎士を睨みつけた。二人の間で見えないながらも強い殺気がぶつかり合っていた。

「てて、背中、いったーい」

「いいから、さっさと下がってなっ！！」

彼が叫び、普通の虎の倍はあるつかという白い巨体が私を守るように前に立ち塞がった。そして槍を持つ甲冑をまとった男を睨み据えていた。

さっきの風は彼が私を守ってくれたのだ。こんなところで捕まるわけには行かない。まだ死にたくなかった。何とか立ち上がると、私は彼に声をかける。

「グレンさん、気をつけて……」

「あ？ 小娘に心配されるほど柔じゃねえさ。森へ走れっ！！」

グレンが叫ぶと目の前の騎士が鉄槍を構え、炎でその先端を取り囲むと必殺の突きを放っていた。対し白虎はその身に風をまとい、気炎を上げると二人はぶつかり合っていた。

風と炎が両者の間でぶつかり合い、視界を熱く染めていく。火が乾いた草に燃え移り、地を舐めるように焼いていた。

私は熱気に目を瞑り、どちらが戦いを制したのかを見極めようと目を開く。力と力がぶつかり合い、暴風が吹き荒れて、スカートまで捲れそうになるのを必死に押さえた。

敵は一人、たった一人だ。なのに私は逃げろ、と言うグレンさんの言うとおりに走ることではできなかった。

激突する二人、神速の如く振るわれる鉄槍。それを紙一重でかわし、爪を振るう白虎。だが、徐々にかすり傷では済まない傷を負わされていく虎に、私は逃げることにすら忘れて動けなくなっていた。

魔法という超絶の力を振るう超人同士の戦いを、ただ熱い頭で熱に浮かされたように私は眺めていた。

「虎を誑かしたか、魔女めっ！！」

騎士から放たれた言葉が私の耳朶を打った。甲冑の面頬をグレンの爪によって剥ぎ取られ、怒りの形相の面相に変えた騎士が叫んでいた。

違う、私は魔女じゃない。

騎士に躍りかかる白虎。だが燃え盛る槍がついに虎の肩口を刺し貫いていた。ブスブスと煙を上げ、炎がグレンさんの傷口を焼いていた。残忍な笑みを浮かべ、騎士が槍をさらに突き通す。

吼える虎の叫びに私の意識は散りじりに乱れていた。

崩れ落ちる虎にとどめを刺そうと騎士が槍を振り上げていた。

「ダメーっ!!」

「嬢っ、来るんじゃないねえ」

グレンが叫び、それを無視して私は飛び出していた。それを見て男が狂喜に満ちた表情で槍を引き抜いていた。

「殺してやるぞ魔女っ!!」

歡喜の声を騎士が上げ、鉄槍がひるがえり騎士が構えた。その狂気の目が私を捕らえ、紅に染まる槍を繰り出していた。その軌道は確実に少女の心臓を捕らえていた。

その瞬間を

私は

まるで、時が止まったかのように見ていた

時よ、止まれ

私はその時、その声を聞いていた。黒い髪の一人の青年の姿を、

光の果て、幻の屋気楼でも見るかのように見ていたのだ。

黄昏の娘よ、望め

その唇が動き、青年の声が告げた。

その声に、私はただ助かりたい。とそれだけを願っていた。グレ
ンさんを死なせたくなかった。

そして、時は動き出す

騎士が放った必殺の突きは確かに娘の心臓を捕らえたはずだった。
だが槍は虚空を貫き、男は驚愕に目を見開く。いかなるまやかしの
技か、魔法か。倒れた虎も姿を消していた。

「おのれえええっ！！ 殺してやる、殺してやるぞ。魔女おおお」

戦場となった森の手前で男は槍を大地に突き立て、燃え上がる地
面を背に叫んでいた。

深い深い森の奥 傷ついた白虎が森の繁みから姿を現した。そ
の背には一人の少女を乗せ、満身創痍で一步を踏み出すと、赤い血
がポタポタとその足元を濡らしていた。

虎は貧血によるめまいに足元をよろめかせるが、少女を落とすま
いとすっかりとふんじ張り、歩き出す。

「魔女か…奇蹟を起こすから魔女って言うんだぜ？ 嬢ちゃんよ…
…へへ」

その肩で暢気に眠る少女に声をかけると、虎は深い森の中に再び
姿を消していく。夜空高くの満月だけが二人を静かに見守っていた。

私の名前は水瀬やよい。突然この世界に迷い込み、どういうわけ
か追われる身となってしまいました。

非常識なことに、この世界には魔法があつて、私のことを魔女と
呼ぶ人達がいいます。何が何だかわからないけれど、逃亡の道連れに
なったのは人虎のグレンさん。

言葉は何故か通じるけれど、お金はないし、お腹は減るし、明日
の寝床さえない始末。おまけにこれから森に入るようです。

前途多難に思わず、はあっと大きいため息をついてしまいたい心
境です。

何故かわからないけれど、おつかない騎士に追い詰められた私達
は謎の黒髪の青年に助けられました。何者なのでしょう？ 謎は
深まります。

一体どうして、私はこの異世界に呼び出されてしまったのでしょ
うか？ 私達の旅はまだ始まったばかりです。口は悪いけど、とて
も頼りになるのはグレンさん。まだ仲間は少ないですが、私達の力
になってくれる人達がこれから登場します。

オープニングは物語の序盤。主人公達が出会い、逃亡者となって

放浪を始める手前のシーンとなっています。もし興味をお持ちいただけたら、次のページへとお進みください。あなた方が新たな冒険の始まりに胸をときめかせられますように。

【0】 オープニング（後書き）

2012/01/12

全部、書き直しています。

ここはOPの見せの部分で、次回は異世界にトリップするシーンから入ります。

【1】 終る日常（前書き）

登場人物

水瀬やよい・・・・・・・・本編の主人公。

つものようにポニーテールにする。

ヤバイ、服がない……、と壁を見れば釣り下がっているのは学校の制服のみだった。横着したもので、洗濯物は溜め込んでいたのだ。姉に見つかれば眉を吊り上げるのだが、ここの所忙しいのか、男でもできたのか、家で家族全員が顔を会わせることが少なくなっていた。

「クリスマスだしねー」

そう私は呟いて下着姿で震えていた。肝心の着ていくものがない私は選択の余地がなく、速攻で制服の釣り下がるハンガーを手に取っていた。

どうせ、コート着ちゃえば下が制服だろうと関係ないつと、と開き直り、それを着てコートを羽織った。バイト先ではどうせ制服は着替えるのだ。

慌しく着替え終わり、玄関の丸い小さな鏡を私は覗き込んだ。

鏡の中にやよいの小さな顔が映る。

大きなアーモンドアイがぱちくりして私自身を見つめ返していた。頬に後れ毛が揺れる。メイクアップする時間はない。

私は前髪を軽く摘んでにっこり笑ってみせる。

「うん、かわいいぞ。やよいつ！ 今日も張り切っている」

結構スマイルには自信はあるのだが、それを特定の男の子に向けたことは残念ながらまだない。もっぱらバイト先でのゼロ円スマイルばかりである。

彼氏いない歴〓年齢です……。

笑顔、笑顔。さあ、バイトだ！ と私は空元気を回転させてブー

ツに足を通した。

携帯はポケットと…ポケットに手を突っ込んで所在を確認する。電池はさっき充電したばかりだ。最後にスカートの裾をつまみ、問題ない、と誤魔化した。

玄関に置いてあるホワイトボードは家族の連絡用の掲示板だった。やよい用のサインペンで「25日 バイト」と書いて二重に花丸を描く。書き込みは母親とやよいのもので半分くらい占められていた。姉はたまにしか書き込まない。父親は今は出張中で二ヶ月は帰らない予定だった。

「行って来ます」

応える声はないが、私はそう呟いて、冬の装いになったやよいは玄関の扉を開いていた。

【1】 終る日常（後書き）

シーンがまったく切り替わるところは分離して投稿することにした。

何となくその方が私の好みだったから。

【2】 気がつけばそこは・・・（前書き）

登場人物

水瀬やよい・・・・・・・・本編の主人公。

王・・・・・・・・この国の王様？

【2】 気がつけばそこは・・・

昔から、私の周囲では不思議なことがよく起こった。

それはやよいが小さい頃に見た、水辺の不思議な人魂や、草原での妖精達との楽しく遊ぶ夢や、少し怖いけれど、森で出会う、人の言葉を解する動物達であったりした。

彼らは現実で、森で出会う不思議な存在はかつては私の一部であった。

そうした不思議が起こる時、私というミナセヤヨイという存在は、この世とは別の場所に繋がっていた。

神隠しのやよい

誰がそう呼んだのかは知らないけれど、小学生の頃の私はそつちの世界こそが私の世界だと信じていたのだ。本の中の幻想はやよいの現実であったのだ。

両親や姉や周りの大人達の存在が私にとっては不思議であった。彼らは常に私のすべてを否定したからだ。友達もいなかったが、森で出会うものすべてが私の友達であった。

その世界にいる時、やよいは大人達が現実と呼ぶ世界にいなかった。それゆえに他人にはまるで神隠しにあったかのように映ったのだろう。不気味な子どもとして扱う大人も少なくなかった。

姉は妹という存在を逆に無視し、家の中では空気扱いされていた。両親は困惑し、ただただ、突然いなくなるという現実に抗議する人達にひたすら頭を下げていた。

そんな人達の行動をやよいはバカなこと言ってるのはあちらさんだと、周囲を気にすることなく受け入れていた。

だけど時は過ぎて、私の森は遠い世界に行ってしまった。森の聲はどこかに消えてしまった。

中学に入る前に家の引越してすべては奪われてしまった。もうあの森に帰ることはない。今は灰色のコンクリートに覆われた街が私の世界ですべてだった。

現実という時間に押し流される空間の中で、普通という概念に身を押し込まれた私の日常は無下に過ぎ去っていく。

「はえ？」

我ながら間抜けな声が出た。あまりにも突拍子で、突然で、どう理解したらいいのかわからない。そんな響きを持った声であった。空を見上げれば灰色の空からは雪が降ってきていた。

はは、ホワイトクリスマスか、恋人さん達はラッキーじゃん。

周囲の人達の視線が突き刺さる。その居心地の悪さと周りの不衛生さに私の思考はフリーズしていた。雑踏の中、暗い空の下、人々が白い息を吐きながら路地を行き来している。

えーと…ここはどこなんでしょう？

家の玄関の戸を開け、気がつけば見知らぬ街路に佇んでいた。

そこは欧州の町並みにも似ているが、どこの国の建築様式なのかもわからない。レンガ造りの壁に大きな石をはめ込んだ石畳は歪んでいて、道路は真っ直ぐ平坦ではなかった。

街並みに相応しい街灯の柱は存在せず、暗くなった路地裏は不衛

生さも相まって、一層不気味さをかもし出していた。

建物の屋根は高く赤い色に塗られていて、屋根から突き出した煙突からは白煙がなびいているのが見えた。

ガラガラと音を立てて馬車を引いた馬が駆けてきて、慌てて路上の端によると、汚水が跳ねて私の顔を汚した。顔に手を当てれば泥水の混じったそれが私の手を汚して、思わず手をこすっていた。

道路は今通り過ぎた馬車が二台分もないくらいの幅だ。私は石壁に背をつけて、暗がりの中、通り過ぎる人達を恐る恐る観察した。

皆急いでいるように見える。肩に布袋を提げた男達が何人もいる。女もいるが顔をフードで覆い隠している。服装は粗末で、どうみても現代ファッションからは程遠いものだった。色褪せ、つぎはぎも当てあれ、それが模様となっていた。

それに興味をそそられなくもなかったが、今はそんなことに気を回している場合ではなかった。観察の結果、ここにいる人達はみんな白色人種だった。

映画のロケに迷い込んだとか、そんなレベルの出来事ではなかった。まるで玄関を開けたら、そこは異世界でした級の珍事だ。

はは…まさかね？

薄暗い路地に立ち尽くしながら、いつまでもここにいるのは気が引けて、私は早く立ち去りたい気分になっていた。

私はコートごと身体を抱きしめていた。

だが、どこへ行けばいいのだろうか？　ここは日本なのだろうか？　疑問に答えを出すのを保留して、冷たい手に息を吹きかける。

夢であるならとっくに冷めている。この寒さだ。ホッカイロが欲しかった。

「黒髪の魔女だよ……」

行き交う人々の雑踏音に紛れて、その囁くような声を私は聞き取っていた。そちらに顔を向けると、建物の隙間の暗がりから、汚れた顔の5、6歳の少年がやよいを見つめていた。

ぼさぼさの髪に半裸に近い状態で、肩から布切れがずり落ちる。服も身体も泥で汚れ、人種さえも不明だった。

魔女？ その子が言ったのだろうか？ 魔法使いとか、そんな関係の魔女のことだろうか？

「えと、君…？」

やよいが声をかけると、ビクリ、と少年の怯えたような表情が私を見返した。突然、暗がりの奥から少年より年長のガリガリに痩せた少女が現れ、私を睨みつけると、乱暴にその男の子の手を引いて駆け去って行ってしまった。

その暗がりの向こうに消えた二人の子の背中を見つめたまま私は動けなかった。あの二人が見せた怯えの色が忘れられなかった。

私は何もしていない、なのに何故？

私の意識を引き戻したのは街路のざわめきだった。どこからカラッパの音が響いて来るのが聞こえた。その音を辿って、やよいは路地から大通りらしい交差する道に出る。多くの人達が集まって口々に何か言い合っていた。

辛うじて聞き取れたのは、どうやら日本語のようだった。だが癖の強い言葉で、まるで方言を解読するような感じだったし、喧騒に紛れてよく聞き取ることはできなかった。

松明の火が鉄の入れ物にくべられて燃えている。火が爆ぜて音を立て煙を上げていた。木が焼ける匂いがした。それが大通りのあちこちに設置されていて、人々がその周囲に暖を取るようになら集まっていた。

風が吹いて寒かった。耳まで冷たくなっていたからコートのフードを目深にかぶる。松明の側には近寄れなかった。そこにいる人達の雰囲気はどこか私を遠ざけさせていた。

またラツパが吹き鳴らされる。今度はさつきよりもその音を大きく聞き取っていた。

道の向こうの曲がり角から細長い棒が見えて、その先には赤い布がはためいていた。それを私は旗だと気がつく。紋章が描かれているようだが、やよいの位置からではよく見えなかった。

その先頭から歩いてくるのは兵士のようだった。兵士とわかったのは同じ制服を着た集団だったからだ。その格好を見て私は驚いてしまった。

あまり歴史ものには詳しくないけれど、フランスの銃士が着るような服を身につけ、羽根突きの帽子をかぶり、腰にはサーベルを下げている。

いわゆる三銃士に出てくるような服装だ。やよいの浅い知識ではそう理解するのがやっとで、その列が目の前にやってくると、人々が用意していた色紙をばら撒き始めた。

あまり衛生的でもない道だが、色とりどりの紙が頭上の窓やあちこちからばら撒かれて、行列は一層派手さを増した。併歩する音楽隊がドラムを鳴らし、音楽といえるのかわからない騒音を奏で立てた。

その音の不快さと人々の声に私は耳に手を当てる。右を見ても左を見ても熱狂する人達の熱は収まらない。胸に暑苦しさを感じて、

何だか気持ちが悪くなっていた。

王様だよっ！ と誰かが声を上げた。

大きな馬車が通り過ぎる。その上に一際立派な服装をした青年が座っていた。頭には金の冠をかぶり、襟元がふわりとした毛つきの宝石を散りばめた赤いマントを羽織り、その細身の身体を包んでいる。

炎が青年の顔を照らし出す。鋭い眼光は強い意思と野心の色を湛え、口元はその目とは裏腹に笑みを浮かべていた。知的な風貌だが、野性的、というより獰猛な野禽類を思わせる雰囲気強く身にまとっていた。

王と呼ばれた青年の両隣には、白い羽の生えた天使の衣装に身を包んだ、そっくりの顔をした美貌の天使が二人座っていた。その双子は年の頃は一〇歳くらいで、金色の柔らかな髪に澄んだブルーアイの双眸を持っていた。

周囲の歓声を受けながら、表情は無表情を貫いていて、天使は少年なのか少女なのかまでは判別できなかった。

突然人々がざわめいて、群れた人々が散り始めた。何ごとかを見ると、馬に乗った騎兵が威嚇するように道端の人々を追い立てている。騎兵は一人ではなく、あちこちで馬に乗って鞭を振るっていた。その中にやよいも巻き込まれていた。逃げ遅れ、逃げ惑う人々に突き飛ばされ、街路脇の民家の前で転んだ。

私は痛みに顔をしかめる。膝から赤い血が流れていた。

長い鞭が振り上げられ、人々を追い立てるように路面に鞭が激しく叩きつけられる。黒い帽子をかぶった、青い制服を着た騎兵の男達。

その音に心臓が止まるようなショックを受けて、やよいは身動き一つできなくなっていた。

馬のいななく声がすぐ側で聞こえて、見上げると馬上から見下ろす冷たい青い目が私を見下ろしていた。

怖くて動けない。騎兵の手に握られているのは鞭だ。恐ろしさに身を強張らせる。目を瞑ったが、鞭はいつまでたつても振り下ろされなかった。馬の蹄の音がこだまして遠ざかる気配を耳にして、ようやく私は恐怖から開放されて目を開けていた。

そして何事もなかったように馬車が通り過ぎていく。

頭を押さえ、屈みこんでいたやよいは、ようやく顔を上げて立ち上がった。その時、馬車の上から民家の方に顔を向けていた男と視線と視線が交じり合った。王と呼ばれた青年の鷹のような目が私を見ていた。

気のせいだろうか？ それはほんの一瞬のことで、すぐに視線を前方に戻すと、市民に手を振って応えていた。

その列が通り過ぎるまで私は震えて動けなかった。寒さに手も足も凍える。怪我をした膝小僧が痛かった。行列が向こうの道に去り始めて、人々も揃って歩き始めていた。

急に場違いさを感じて、ここにはいけないような気がしていた。人々が歩き出す方に逆らわずに歩き出し、路地を伝って足早に遠ざかろうとした。気持ちが急いで、フードが脱げたことにも私は気がつかないでいた。

【3】 追っ手（前書き）

登場人物

水瀬やよい……………本編の主人公。

グレン……………ワータイガー。

【3】 追っ手

人のいない路地裏。あの行列も喧騒も遠ざかって、私は何とか落ち着きを取り戻す。その時、人の気配を感じて振り向くと、数人の男達が路地の向こう側からやってくるのが見えた。

その男達は腰にはサーベルを差し、緑色の銃士の服を着ていた。違うのは覆面をかぶっていること。目元だけが露になっていて、それ以外で露出している部分はなかった。

最初は気のせいかと思っただが、その足取りは躊躇うことなく私を追いかけているのだと理解して焦っていた。急いで走り出せば気がつかれてしまうから足早に足を急がせていた。

路地裏の石畳は狭く、人が二人、やっとすれ違うほどの幅しかない。角を曲がり、そこでようやく私は走っていた。

街の地理の知識などまったくない。勘に任せて細い道を駆け抜け抜けると、連中も気がついたのか、街路に靴音を響かせ追いかけてくる。

細い道から建物の間の通路を抜けて曲がる。民家の壁らしい崩れかけた壁穴を見つけて、私は急いでコートを脱ぐと、その穴に服が汚れるのも構わずに身を押し込んでいた。

這って、身体を寝かせてその穴をくぐると立ち上がれず、疲労感で座り込んでしまいそうになる。服についた泥を払って何とか立ち上がる。

追ってくる気配と足音はすぐそこで、靴音が石の路面にこだまして、私の心を急かたてているかのようにだった。

廃屋の半ば半開きの腐りかけた戸に触れると中は暗かった。そこに身を滑り込ませ、コートを抱いて座り込んでいた。

男達が抜け穴に気がついて目をつければ終りだった。暗がりの中

で心臓が早鐘を打ち、やよいはかじかむ手を両手で握り締めて息を吹きかけ、祈るように目を瞑った。

どうか、行ってくれますように！

「おい、こつちにはいないか。見逃したか？」

「そんなわけがない。もう一度探せよ」

「黒髪の魔女だ。捕まえれば金貨一〇〇枚だ」

魔女。またその言葉だ。黒髪の女。それは間違いなく私のことだろう。金貨一〇〇枚がどれだけ価値かわからない。だが、男達が躍起になって捕まえようとするほどの額だ。

男達の気配が遠ざかる。一分、二分：五分は過ぎただろうか。その時間を永遠のように感じて、手をひたすら擦っていた。

もう来ないだろうか、と安心して立ち上がると、背後から肩を思い切り何者かに掴まれていた。その万力のような手が肩を抱き、やよいの口にその骨ばった手を押し当てていた。

私は心臓が飛び上がるほど驚いて、悲鳴すらも出てこなかった。

「しゃべるな」

耳元でそのしわがれた声が脅し声を上げる。叫び声は上げられない。外の男達に気がつかれてしまうかもしれない。実際は出そうにも出せないのだが、謎の男はやよいの事情になど頓着はしなかった。

「女、質問に答える。何故プロワの部下に追われていた？ 手を離すぞ。叫んだら殺す」

襟元に銀色の鈍く光る刃が突きつけられた。その刃が妙に非現実

に見えていた。

「プロワ？ その名前に聞き覚えはない。私は首を横に振った。正体不明の男に密着されている不快感が身体を突き抜ける。怖かったが、遠のきそうな意識を何とか引き締めていた。」

「知らない。そんな人達……」

やっとのことでそう答えるが、万力のような手に力が込められる。

「答える」

私は痛みに悲鳴を堪え耐える。あの男達は何が目的だった？

「き、金貨一〇〇枚だって」

「何のことだ」

「私を…捕まえれば…金貨一〇〇枚だって……」

途切れ途切れにようやくそれを伝えるが、やよいを拘束する手は緩まなかった。訪れた沈黙は男が思案する間だったのだろう。

「今から離す。ゆっくりと振り向け。妙な真似はするな。それと質問された以外のことには答えるな」

なんとという上から目線。こいつきつとかなり意地悪ね、と勝手に決め付けると、やよいは言われたとおりにゆっくりと、足元を回転させて振り向いていた。

暗い室内に男の影。ゆうに一八〇センチは越えているであろう姿が陰になって見えた。割れた窓から差し込む光だけが頼りだった。男の手にはナイフが握られたままだ。刺激しないよう、馬鹿みただけで愛想笑いを私は浮かべていた。

「どこから来た？」

「……」

「答える」

「に、日本……」

「ニホン？ どこだそこは？」

「どこって……。ひっ……」

ナイフがきらめき咽喉元に突きつけられていた。ごくりと私の咽喉が唾を飲み込んだ。男の鋭い眼光がやよいいを捕らえて離さない。

「質問に答えると言ったろう。名前は？」

「水瀬やよい……」

「ミナセヤヨイ？ 妙な名前だ。格好も変だ」

容赦ない勝手な批評に少しばかり私は腹が立つ。男の目に好奇心が浮かんで、学校の制服を上から下まで眺めていた。

セーラー服をじろじろ眺められるのはあまりいい気分ではなかった。特にそういう類の視線は同年代の子からおじさんまで容赦なく浴びせてくるものだった。その視線にどういう意味が込められるのかを知らないわけでもない。スカートの丈は校則でしっかり守っているつもりだ。

だが男はすぐに興味をなくしたのか、コートに手を伸ばさず。そしてポケットの中から学生証を取り出していた。

「これは何だ？」

「が、学生証。私の国の……」

「学生か。年はいくつだ？」

「一六です……」

〇枚ってわけか」

意地悪く男は口の端を曲げて笑った。

やっぱり…私は突き出されるんだ、とやよいは絶望感でいっぱいになる。今でさえわけがわからないのに、お金と引き換えに取引されてしまうのだ。

泣きたくなる。突然こんな場所に放り出されて魔女扱いされ、男に苛められて、お金欲しさに売られるのだ。まるで不幸のオンパレード。なんか…腹立ってきた。

「何笑ってるんですか？」

私は男を睨みつけていた。もう怖くなんてないんだから、と強がりだが、そう自分を奮い立たせる。

「いや…魔女ね。お前が本物なら俺が連中に突き出す理由はない」
「へ？」

どういう意味だろう？ 本物なら？

「何故なら俺とお前は……」

そう言った男の横顔をわずかな明かりが照らす。そして金色に光る双眸に変えて黒髪の少女をその目に映し出していた。

何、何なの？ 目の前の男をじっと見て私は震えていた。光る双眸は金色で、人のものとは到底思えない。この男は人じゃない？ 人でなかったら何者なのか？ 私はゴクリ、と渴いた咽喉に唾を飲んでいた。

その時だ。物々しい気配がこの家の周囲を取り囲んでいた。それ

に気がついて私は窓の外を見た。ここからでは何も見えないが、男の目が細まって口に指を当てた。

黙っている、という合図だろう。それに従うか迷って、結局、やはりは立ち尽くしたままでいた。窓の側に寄り、油断なく外の気配を覗いた男が笑う。

「ひい、ふうみい…奴ら、かなり仲間を連れてきたようだな。ずらかるか」

そう言つて男は首を振ると、部屋の奥に歩いていく。

「へ？」

「巢を嗅ぎ付けられちまったからなあ。ま、いいけどな」

「ど、どこ行くんですか？」

「どこつておめえ、ずらかるつて言つたらう？ 無宿人だしな。あいつのに捕まるとめんどくせえ」

あばら家の窓を開けて男が半ば身を乗り出すした。

「わ、私はどうすれば？」

何だか置いていかれそうな気がして、慌てて私は声をかけていた。一人放り出されるのはごめんだ。

「あなたは金貨一〇〇枚で連中がお持ち帰りだろう？」

え、ええー？ そ、それは無しでお願いしたいです。

「それは断固拒否です！ 私、捕まりたくありません」

「じゃあ、逃げるしかねえなつて。駄目か、すっかり囲まれてら」

振り返った男の目が真剣なものになる。そしてやよいを上から下までじっと眺め回す。

「あんだ、魔法使えるのか？」
「えっと……」

その言葉に私は俯いた。どうしよう、さっきは魔法だ、なんて言っただけで、あれはただの携帯のアラームだ。羽織りなおしたコートポケットの上から携帯を握り締める。こんなものがどうして役に立つのだろうか？

「なるほど、なるほど……。じゃあ、金はあるか？」
「お金は……その……」

財布の中にある千円札がこの世界でどれだけ価値があるのかわからない。というかただの紙切れ扱いされそうな気がする。答えようがなくて黙ってしまふ。

「じゃあな、元気で生きるよ」

くるりと振り向いて男は片手を振るとしみじみとそう告げた。

「え、ええ！？ さっき、私が魔女ならどうこうって言ったじゃありませんか」

「言ったなあ、うん。本物ならな。本物の魔女ならばだ。見た感じちつと変わった格好しちゃいるが、あんだは人間だ。違うかい？」

「…はい」
「だよねえ…やっぱり」

その時、じわり、と目元に滲むものが私のまぶたを熱くしていた。耐えていたものがもう耐えられなくなつて決壊を起こしていた。

こんな見ず知らずの場所に突然放り出されて、怖い目に遭つて、男達にどんな目に遭わされるかもわからないのだ。出会つたばかりで怖いけれど、目の前にいる人にすがりたくなつてしまつた私は馬鹿だ。途方もなく大馬鹿だ。

「あのなあ、泣くんじゃねえよ……」
「ご、ごめんなさい……」

男は頭をかいて苦虫を噛んだような顔をする。

私はハンカチを取り出して顔に当てる。恥ずかしい。泣いている顔を見られてしまった。私の助けてくれるんじゃないかという勝手な願望をこの人に押し付けた。そんなことを考えたのをこの人に知られたくなかつた。

話してみても本当はいい人そうに思えた。けどすぎるのはこの人を利用することだ。何だか自分が恥ずかしくて、また涙が出てきた。

「ふむ」

と呟き男は頭をかいだ。

「まあ、後払いでもかまやしないけどよ」

「え？」

「どうせ逃げる手間は一緒だしな。一つだけ言つとくぞ。しがみついて絶対離すんじゃないやねえぞ？」

「あの…どういふ意味ですか？」

ぐしよぐしよになつたハンカチを離して訊ねる。

「ああ、見てなつて。後、驚いて悲鳴とかも上げるんじゃない。俺様の取つて置きだ」

何だか意味がわからないことを言つて、男は床に四つんばいになる。そして息を吐き出すと空気が震えて男の姿形が変わり始めた。むきむきと筋肉が盛り上がり、その姿は人でないものに変じ始めていた。

私はそれを息を呑んで見守っていた。人ならざるもの。その変異を目に刻み付けていた。

それと同時に窓から火の玉が投げ込まれて、室内のカーテンに燃え移っていた。見る見るうちにそれは燃え上がり、その火に照らされた男の正体を私は見ていた。

「掴まんな」

「は、はいっ！」

目の前にいるのは巨大な虎だった。動物園で見る虎より遙かに大きくて、その凶悪さに私の頭から血が引いていた。大きな口から言葉が出て驚いたが、それは知っている男の声だったから何とか理性を取り戻す。

「かまわねえから、しっかり掴め、皮一枚分もいたかねえからな」

「わかりました」

その背に跨つてギュウツと強くその毛を握り締める。滑らかなその毛並みは王者の風格があった。

そして戸を突き破って虎が庭に躍り出ると、侵入していた男達に踊りかかった。あつという間に男数人を打ち倒すと、ひるんだ男達の間を突いて街路に飛び出すと風のように駆けだしていた。

「嬢ちゃん、俺の名前はグレンだ」

「嬢…:じゃなくてやよいですーっ」

虎男グレンの名乗りに、私は自分の名前を主張していた。

【4】 ギロチンと炎の騎士（前書き）

登場人物

水瀬やよい・・・・・・・・本編の主人公。

グレン・・・・・・・・ワータイガー。

炎の騎士・・・・・・・・槍使い。

【4】 ギロチンと炎の騎士

「逃げたぞ！！ 撃てっ！ 殺して構わん。魔王の使徒と黒い魔女を殺せっ！！」

軍靴を鳴らして足踏みし、頭上を指差した指揮官の男が怒鳴り散らす。それに従った衛兵達が一斉にマસ્ケツト銃を構えた。衛兵が構えたマસ્ケツト銃から次々に白煙が上がり、銃音が周囲に鳴り響いた。

弾丸が屋根を砕く音がすぐ近くで聞こえて、私は身をすくめていた。銃弾が跳ねて煙突に傷跡をつけるのを見て背筋が薄ら寒くなった。

銃で撃たれた。遠いけれど命中すればただでは済まない。だが、その中を白虎は悠然と眼下の兵士達を見下ろしていた。その胆力を示すように白虎のグレンさんが笑った。

あの…それどころじゃないんですけど！！

「ひ、ひえええ」

「おい嬢ちゃん、しっかり掴まってるや」

渋い声が私のすぐ前から聞こえた。こうなつた原因を作つた本人が目の前にいるのだが、今は反論してる場合じゃなかった。今は生きて逃げないといけないんだ。

「跳ぶ」

次の瞬間、躍動する獣の肉体。その身体が宙を舞つた。月夜にそのシルエツトが浮かび上がる。眼下の街は遥か下だった。

その高さにくらり、と眩暈がして、落ちれば石の床に叩きつけられ、即死は間違いない。そう想像して、私は目をつぶって、グレンさんの背に必死にしがみついていた。

ヒュン、と音を立てて、銃弾がすぐ側を飛んでいくのがわかった。もう心臓がバクバクいっ放しだった。掴まっている獣の毛の下の筋肉が躍動感ある動きを伝えてくる。

「ぎゃふん!!」

衝撃と共に着地。信じられない距離を跳んでいた。その割りに着地した時はふんわりと風が包んだようでそれほど振動もなかったが、私の口から出たのはかなり間抜けな声だった。

「おい、舌嚙むんじゃねえぞ。めんどくせえから」

「あ、あのお…。もっと安全運転をお願いします」

向かいの建物の屋根に下り立ち、息も絶え絶えなやよいの抗議を無視して。グレンは眼下の衛兵達に向き直った。

巨大な、普通の虎の二倍はあるうかという巨体だ。その背に黒い髪をポニーテールにした少女を乗せている。月明かりを背に悠然と立つ姿は、見る者に畏怖と恐怖、そして言いかねぬ神秘を感じさせた。

指揮官が指揮棒を振り回して、撃てっ！ 撃てっ！！ とがなりたてるが、銃に弾を再装填する兵士達が一旦は銃を向けるものの、魔女と使徒という民間にも伝えられる悪魔の存在に恐れをなしていた。

散発的に放たれる銃弾もわざと外して撃っている始末だった。指揮官が怒りのあまりに衛兵を殴りつけていた。

「嬢、耳、しっぴかり閉じな」

「はえ??？」

私は言われたとおりに両耳に指を突っ込んだ。そして虎が吼えた。それは衝撃音となって空気に伝達して伝わり、それを聞いた者の鼓膜に影響を与える。

「ずざ、ざざざー」と音を立てて、建物の屋根に隠れていた兵士達がずり落ちて、辛うじて屋根の縁で止まった。

えっと、隠れていたの？ 男の人達が落ちなくてよかったと私は胸を撫で下ろす。今は私達を捕まえようとする人達だけど、やっぱり死んで欲しくはなかった。

「な、何をしたの？」

「なーに、魔法さ」

わずか目だけを動かして、やよいを見た白虎がそう答える。

魔法って……。私にやり返したつもりらしいグレンさんを見る。

「行くぜ。こんな雑魚相手にしてられねえ。近衛が出てきたらやばいしな。あれを壊す」

「近衛？ あれ？」

やよいの問いかけにグレンは答えずに数歩歩き出すと、私は彼にしっかりと掴まった。そしてまたあの浮遊感が身体を包み、二人は空を飛んでいた。

衛兵達を飛び越え、広場に降り立つ。その駆ける先にあるのは木の枠でできた裁断場。やよいがそれは台上にあるそれがギロチンだと気がついて怖気を感じていた。

まさかあれって……。

「魔女狩りってやつさ。週に一度は誰かが魔女にされて首をはねられる」

「そ、そんな……」

酷い？ 確かに酷い話だ。だが理由があるのだろうか？

「な、何で？ 悪いことをしたから？」

「悪いねえ…連中にとつちや、首をはねるのはただの娯楽なのさ」

「そんな、酷い……」

「だからそいつを俺はぶっ壊しに来たのさっ！！」

グレンがギロチンのある壇上に一気に駆け上がると、見えぬ風が吹いて、ギロチンをあつという間に微塵切りに刻み込んでいた。轟音を立てて、幾百もの血を吸ったギロチンの刃が落ちていく。

飛んだ木屑の破片に目を瞑っていると、再び銃声が響く。見上げれば松明を掲げた兵士達と銃を構えた衛兵達が百人ほど集まっていた。

「用済みだ。ずらかるぜえ」

破壊されたギロチンを一瞥した後、グレンは兵士達に正面から突っ込み、驚愕に右往左往する男達の真上を飛び越えて、広場から、屋根から屋根へ、そして城壁を目指して走っていた。

風の中を駆け抜け、高い城壁は数十メートルはあるものの、あつという間にその城壁を飛び越えていた。

街道が見えて、城門を越えてからも街並みは続いていた。その先はもう真つ暗な世界で、遠くに見える黒い塊が森なのだろうと、私は何とか認識していた。

跳躍する虎は大地に降り立って、遠くに見える森を目指して駆け出した。

「森？」

やよいが眩き、背後を振り向くと、城壁の門が開いて飛び出してくる騎兵の姿が見えた。まだ逃亡劇は終わっていないかった。

「グレンさん。ねえっ！ 馬で追いかけてきてるよ！！」

「しつこい連中だぜ。何、森に入れば追っては来れんさ」

「何で？」

私は疑問を口にする。

「森には魔が巣食うからな。夜の森に人間は近寄らねえ」

その言葉にやよいが安堵する機会は与えられなかった。

町を出る、最後の民家を背にしたその時、大地が爆ぜた。爆音を立て、地煙を派手に吹き出して地面が割れた。そして飲み込むかのようにそれが閉じていく。

あまりの衝撃と音に私は一瞬、気を失いかけた。

ステップを踏んでグレンは割れた地面を上手くかわすと、大地の間隙を縫って、白虎は土の煙幕に飛び込んだ。

「騎兵は魔法衛士だな。奴等に比べたらマスケット銃なんて玩具さ。舌嚙むから黙ってるよ」

「う、うん」

魔法衛士？ 銃が玩具？ 今のって魔法なの？ 疑問はやたらと出てくるが、今はそれどころではない。

目を瞑り、グレンさんに必死にしがみつきながら、振動で舌を噛まないようにギョツと口を閉じていた。背中に土やら何やらが降り注いでくる。

一陣の風となつて虎が大地を駆け抜ける。その速さは風圧で目も開けていられないほどで、何とか薄目を開け、迫り来る光を見たと思つたら、カレイドスコープを覗いたかのような結晶を空に映し出していた。

それは冷気の結晶だった。空中で砕け散り、氷の槍が一斉に振り注いで来た。

えー、あれー、魔法???

虎の周囲に風が集まり唸りを上げる。轟つと音を立てて一陣の風が吹き抜けて、いくつものつむじ風を生み出すと、氷の槍の軌道は外されて、駆ける虎をよけるように落ちていく。そして氷は砕け散った。

冷気の余波がやよいの頬を叩いて、私はその冷たさに身体を振るわせていた。

すごい。けど、あんなの食らったら死んでしまふ。いや、相手は殺すつもりで射掛けてきているのだ。

「まったく、くたびれるなあ。こっちはブランクだっつーの」

そうグレンさんが愚痴るが、森はもうすぐ目の前まで迫っていた。

「が、頑張つて」

何とかやよいはそう言葉を振り絞ると、すぐ後ろまで迫った騎兵

が奇声を上げると、背後から一筋の紅の槍が放たれ、二人を追い越すと、大地に突き刺さって爆炎を上げていた。

「きゃーっ!!」

そのショックでグレンさんに掴まっついていられずに私は投げ出されていた。全身を酷く打ちつけていたものの、真っ赤に染まった熱い世界によるよると立ち上がった。

骨は折れていない。でも青あざくらいにはなっているかもしれない。痛む身体を押さえてグレンさんの姿を探す。

「ここだ。早く乗れ」

「は、はい」

すぐ側にグレンさんがいた。その背に手をかけて乗ろうとするが、不意に感じた殺気が私を凍りつかせていた。

「逃がさぬ」

声に怒気を封じ込めた一人の男。銀色の甲冑に身を包んだ男が月光を背に槍を携えそこに立っていた。

【4】 ギロチンと炎の騎士（後書き）

ここでOPシーンに繋がります。

今回は別視点入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3171ba/>

気がつけば異世界の黒き魔女

2012年1月14日10時46分発行